

研究研修・調査報告書		会 派 名	公明党
		代 表 者 名	
		無所属議員名	
研究研修・調査 議 員 名	森 秀樹		
	春増 勝利		
研究研修・調査 日 程	2025 年 8 月 20 日 ~ 2025 年 8 月 21 日		
研究研修・調査 報 告	1	研究研修会開催地・調査先進地 富山市 富山市役所	
		研究研修・調査内容 富山市の富山型ディサービス事業について	
	2	研究研修会開催地・調査先進地 富山市 このゆびと一まれ	
		研究研修・調査内容 富山型ディサービス「このゆびと一まれ」視察	
	3	研究研修会開催地・調査先進地 富山市 Peaceful House はぐれ雲	
		研究研修・調査内容 共同生活型自立支援施設「はぐれ雲」視察	
	4	研究研修会開催地・調査先進地	
		研究研修・調査内容	
	5	研究研修会開催地・調査先進地	
		研究研修・調査内容	

研究研修・調査報告（所感、提言事項、課題等）	
1	研究研修会開催地・調査先進地 富山市 富山市役所
	研究研修・調査内容 富山市の富山型デイサービス事業について
1 富山型デイサービスができた経過 平成5年に富山赤十字病院を退職した3人の看護師が開所したデイケアハウス「このゆびと一まれ」において、赤ちゃんからお年寄りまで、障がいのあるなしにかかわらず受け入れたことから始まり、のちに「富山型デイサービス」と言われるようになった。 2 富山型デイサービスの特徴 小規模・共生・地域密着 3 行政との連携 H5 まだ国の制度はなく、高齢者は老人福祉法、身体障害者は身体障害者福祉法、知的障害者は知的障害者福祉法、障害児は児童福祉法の各法により、設備・人員基準が定められていて、行政からの支援は得られなかった。 H8 障害者、H9 高齢者と行政との連携が始まり、H10 富山県民間デイサービス育成事業が開始。H12 介護保険制度、H15 支援費制度が始まった。 H15 より富山型デイサービス推進特区が認定され、介護保険上の指定通所介護事業所での知的障害者（児）のデイサービスの利用が可能に。 H18 障害者自立支援法が施行され富山型デイサービスが全国展開される。H23からは就労継続支援B型の指定を受け、福祉的就労の場としても拡大するための基準緩和。 4 効用 高齢者にとって日常生活の改善や会話の促進。障がい者にとっては自立へとつながっていく効果。児童にとっては他人への思いやりや優しさを身につける教育効果。地域にとっては地域住民の福祉拠点。 5 支援 ハード面では富山型デイサービスを新規に立ち上げる際の助成制度があり、施設整備に1200万円、古民家活用で600万円の助成などがある。 ソフト面では、富山型デイサービス起業家育成講座や職員研修会を事業として行っている。 課題としては、街中での事業所開設が少ないことがあげられていた。高砂市でも地域共生を進める中で、このような共生型の事業所の開設が期待される。	

研究研修・調査報告（所感、提言事項、課題等）

2

研究研修会開催地・調査先進地

富山市 このゆびと一まれ

研究研修・調査内容

富山型デイサービス「このゆびと一まれ」視察

8月20日15時より「このゆびと一まれ」の施設見学。富山型デイサービスの創始者でもある惣万佳代子さんと懇談していただいた。

1 創設当時の苦労

開設当初は行政からの支援がまったくなかった。事業の継続を考え、何度も交渉するが法律の壁に直面。しかし、京都大学の外山義教授（高齢者施設の個室化やグループホームの設計などを進めた建築家）より、「敵を間違えるな」と言われ、行政は敵ではなく仲間だということと考えなおす。厚生省の審議官が訪ねてきて制度が進んだ。

2 就業支援について

富山型デイサービスの事業所でネットワークを作って、就業支援が広がった。全国のB型就労平均以上の報酬を払うことができている。実際に私たちを迎えてくれた職員は知的障がい者であるが、30年にわたって「このゆびと一まれ」で働き、現在は自立できているという。派遣される事業所を訪問し、どんな仕事ができるかを見て、それに見合った報酬を出すことになっているということだった。これも、富山型デイサービスだからこそ実現した障がい者の自立支援であると実感した。

向かいの施設でも、以前はデイサービス利用者だった男性が、今ではニコニコしながら私たちを迎え、生き生きと部屋の掃除をしている。惣万さんの考えで、障がいがあっても、できるだけ自分で通える人は、送迎ではなく公共交通を使って通えるように支援しているという。社会との接点を持つことでより豊かな生活ができるという考えからだ。

ある利用者は、バスの中で眠ってしまい車庫まで行って大騒ぎになったり、駅で動けなくなったりしたこともあったが、「このゆびの子だ」と駅員が知っていたから助かったという。また、一人暮らしの高齢者が「うちで休んで行き」と声をかけ、何時間も話を聞いて帰りが遅くなり、みんなで探し回ったことも。これらのことから、地域にどれだけ溶け込んでいるかがわかる。惣万さんの「全てが人と人とのつながり」という言葉の通りであった。

利用者からスタッフとなった人たちに実際に接して、どれだけの人が「このゆびと一まれ」に縁することで自分らしく輝いた人生を送っているのだろうと感激した。もちろん本人だけでなく、その家族、出会った人たちと考えると15人の小さな施設ではなく、何十人何百人の人たちが、その人らしく輝くことができている。

3 地域の理解

「このゆびと一まれ」を開設するために2度ほど公民館で説明会を開いたが、県下でも初めての施設であることから、時には夜9時までになったこともある。オープニングには富山県で初の高齢者施設ということでテレビや取材が多数あった。偶然、5月12日はナイチンゲールの誕生日で看護師である創設者3人で喜んだそうだ。

隣町に「このゆびと一まれ茶屋」を開設した時は、町内会長が「茶屋という地名をつけてくれたことが嬉しい、地域の誇り」と挨拶をしてくれたが、やはりそれまで何度も住民説明会を開いた。茶屋のグループホームは、亡くなった夫婦が福祉のために役立ててほしいと遺言を残し、遺族がこのゆびの実績も調査して家を提供、富山市から惣万さんに話がありグループホームの開設となった。富山市では、このように空き家を活用して、実質資金がなくても富山型デイサービスが開設できるように支援されている。惣万さんたちが30年間にわたって、行政と交渉してきたこともあるが、実際に利用者や地域の変容こそが、その効果を実証している。

視察の当日、「このゆびと一まれ」には3名の高齢者（1名はベッドで寝たきり）、数名の子どもたち、スタッフ数名が賑やかに過ごしていた。子どもたちはスタッフの人に寄り添ってもらうだけでなく、各々が自由にしたいことをしている。寝そべっている子もいれば、ブロック遊びに夢中の子も。寝たきりの高齢者のそばで話しかける子どももいる。とにかく、職員の表情が明るい。だれが障がい者で健常者かわからないし、区別する意味もない。大きな声を張り上げたり叱ったりすることもないので、同じ空間で惣万さんのお話を伺うことができた。自然に時が流れて、共生とはこういう空間のことを言うことを実感できたことが、今回の視察の最大の成果である。ぜひ、この空気を多くの人に見てほしいと感じた。

富山でも街中では富山型デイサービスは難しいと説明を受けていたが、これから高齢者が増え、地域で支え合う必要が必ず出てくると思う。惣万さんも公民館などがこういう富山型の場になればと語っていたが、高砂市の地域交流センターも公設民営で共生を具現する場になっていけばいいのではないかと考えた。

何人かの職員にも聞いてみたが、みなさん楽しくやりがいがあると語っておられた。とにかく若い職員の表情がいい。そして驚くほど利用者の様子を目配りができている。健常者も障がい者も一緒に働いている様子がすばらしく、区別をつける意味がないことを思い知らされた。定員が15人という少人数であることもポイントだと感じた。

惣万さんは、子どもの意思を一番に考えたら不登校という発想も無くなるのではないかと語っておられた。自分が次に取り組むのは、不登校だと考えていると。不登校という言葉がレッテルとなり、学校に行かない子どもたちを苦しめているのではないかと。自由登校とでも言ったらどうかと新たな視点も紹介していただいた。

研究研修・調査報告（所感、提言事項、課題等）

3

研究研修会開催地・調査先進地
富山市 Peaceful House はぐれ雲

研究研修・調査内容
共同生活型自立支援施設「はぐれ雲」の視察

1 「はぐれ雲」視察の経緯

高砂市においても不登校や引きこもりが増加傾向にある。2025 年度の政府の骨太の方針に、「引きこもり支援について共同生活による支援を含む自立支援の実態や有効性の検証を踏まえ、取り組みを推進する」と明記されたことで、困難を抱えた青少年が共同生活を送りながら、協調性・忍耐力・責任感を少しずつ身につけて社会的な自立を目指していけるよう 30 年にわたり多くの若者の支援を行ってきた「はぐれ雲」を視察することで、今後の困難を抱える青年の支援に役立てたいと考えた。

2 「はぐれ雲」川又直さんとの懇談

- ・引きこもりの若者は失敗した経験が不足しているので、ここでは失敗していい環境を大切にしている。
- ・2 ヶ月に 1 度の父母会を開催。田植えや稲刈りなど特別な日に一緒に作業をする。夜は懇親会をして当事者の保護者同士で語り合う。個別の相談は次の日に行っている。
- ・自然に触れ農業に従事することが自立への近道と考える。2 ヶ月に 1 度、子どもの成長する姿を見ることで、親も変わることができる。
- ・開所時の 1 番の苦労は、地域に溶け込むことだった。若者の素行も悪く、奇異な目で見られた。しかし、過疎化の村に活気が出て、何より変わっていく寮生の姿が共生を進めた。
- ・「はぐれ雲」を出る時は何をするか決めて出ることになっている。一緒に生活している子が変わることがロールモデルになっている。
- ・事業仕分けで公的支援がなくなった。コロナで利用者が減り、事業は厳しい。
- ・人の役に立ちたいが、失敗しないように生きてきた若者に、今日 1 日の失敗を書かせた。親と離れることが大きい。
- ・自立塾で、自立支援ネットワークを作り、アウトリーチできる人材の育成や受け入れ先の多様化を。国にも働きかけている。
- ・引きこもりを増やしてしまったら、経済的にも自立できなくなってしまう。
- ・学校も、ここでは出席扱いになる。

共同生活や農福連携など、若者の自立支援について示唆に富んだ視察となった。

2025 年 9 月 1 日

研究研修・調査報告書		会 派 名 公明党	
		代 表 者 名 森 秀樹	
		無所属議員名	
研究研修・調査 議 員 名	迫川 高行		
研究研修・調査 日 程	2025 年 8 月 30 日 ~ 2025 年 8 月 31 日		
研究研修・調査 報 告	1	研究研修会開催地・調査先進地 創価大学 夏期大学講座（東京都八王子市）	
		研究研修・調査内容 「成長か、停滞か、衰退か？」－その原因を探る－	
	2	研究研修会開催地・調査先進地	
		研究研修・調査内容	
	3	研究研修会開催地・調査先進地	
		研究研修・調査内容	
	4	研究研修会開催地・調査先進地	
		研究研修・調査内容	
	5	研究研修会開催地・調査先進地	
		研究研修・調査内容	

研究研修・調査報告（所感、提言事項、課題等）	
1	研究研修会開催地・調査先進地 東京都八王子市 創価大学
	研究研修・調査内容 夏期大学講座 「成長か、停滞か、衰退か？」 ―その原因を探る―
創価大学 国際教養学部学部長 杉本 一郎 教授 現代社会において、グローバル化、地政学的な様々なリスクや地球温暖化など、複雑な要素が絡み合い、国家や地域に影響を及ぼし混沌としている。 ある国は、成長を遂げ、ある国は停滞し、ある国は衰退の兆しを示している状況を、数量経済史からの視点での講義でした。 生活水準の向上、雇用の創出、将来世代への責任として、経済成長の重要性であることを改めて認識した。また、経済成長を果たすためには、政治の役割の重要性を学びました。	

令和8年 1月 27日

研究研修・調査報告書		会 派 名 公明党	
		代 表 者 名 迫川高行	
		無所属議員名	
研究研修・調査 議 員 名	迫川高行		
	春増勝利		
	森秀樹		
研究研修・調査 日 程	令和8年 1月 19日 ~ 令和8年 1月 20日		
研究研修・調査 報 告	1	研究研修会開催地・調査先進地 東京都 台東区役所	
		研究研修・調査内容 区立台東病院(指定管理者制度による運営)について	
	2	研究研修会開催地・調査先進地 神奈川県 大和市役所	
		研究研修・調査内容 「こもりびと」支援と地域共生社会の実現について	

研究研修・調査報告（所感、提言事項、課題等）	
1	研究研修会開催地・調査先進地 東京都 台東区役所
	研究研修・調査内容 区立台東病院について
区立台東病院について、公設公営から指定管理者制度による公設民営への移行となり、現在も安定的な病院の運営が行われている好事例として、それらの知見を得るために視察に伺った。 当該病院は過去に都立千束病院であったが閉院となった経緯がある。その後、区民からの要望をうけ区立病院として指定管理者制度により開院されたことから、職員の移行については参考にはならなかったが、安定的な病院経営の状況など、参考となる情報をいただいた。 台東区が東京都内でも比較的高齢化率の高さから、高齢者向けの病院として回復期、慢性期に特化しており、近隣病院とのすみ分けで急性期は診ないという特徴がある。 指定管理期間は平成21年開院より5年間で推移していたが、令和元年より10年間に見直されたことで、より安定した経営が期待できるとのこと。 事業評価について、有識者や医師、区民の代表で構成される運営協議会により病院の運営状況に対する評価が行われている。そのほか年に一度、議会(委員会)への報告も行われている。 指定管理の条件等の協定内容については5年ごとに見直す事となっており、想定外の事象がある場合は、その都度協議のうえ対応しているとのこと。 費用負担について、施設の維持管理については区が負担する事とし、そのほか医療機器等は都度協議のうえ取り扱っている。また今後の課題として、施設の老朽化により新たな施設建設についての費用負担割合の協議が必要となっている。 経営状況について、平成21年の開院当初は赤字で推移していたものの、現在では病院単体の収支は若干の赤字経営である一方で、併設された老健が黒字経営であることや、力を入れている通所リハビリが区民から好評を得ていることなど、それらの事業を合わせると安定的に黒字経営で推移しているとのこと。	

研究研修・調査報告（所感、提言事項、課題等）

2

研究研修会開催地・調査先進地

神奈川県 大和市役所

研究研修・調査内容

「こもりびと」支援と地域共生社会の実現について

2019年に発生した凄惨な事件報道により、ひきこもり＝犯罪予備軍という誤ったイメージが定着したことに対し、「ひきこもり」というネガティブな印象を避け、寄り添いたいという温かみを持たせた「こもりびと」を採用。広報誌等を通じて市民への浸透を図ってきた。

大和市では全国初の条例化の意義として、支援を一時的な事業に終わらせず、恒常的なものとするため、前文に「望まない孤独・孤立」への理解や職員の指針を明記し、市の使命を明確化している。そして条例には市長の強い思いが込められている。

令和6年度より「包括支援係」として主幹1名、係員3名（ケースワーカー2名、コーディネーター1名）の体制で、単なる相談業務に留まらない機動的な支援を実施。また、これまでの「待つ相談」から、民生委員や社協、ケアマネジャー等と連携して「会いに行く支援」へアウトリーチ型に転換。これにより訪問件数が大幅に増加した。支援の考え方について「無理に外に出すこと」をゴールとせず、当事者が抱える「怖すぎる社会」を「怖くない社会」へ変えていくこと。やむを得ず引きこもる選択への偏見をなくす社会の醸成に取り組んでいる。そのための多様な居場所づくりや、社協による「作業中心の広場」や「ZOOM広場」も試行的に開催。次のステップとして社会との「柔らかな接点」を持つ機会の一つとして、ボランティアや市立図書館のバックヤードで実際に作業してみる体験等を創設。そのほか多職種連携による個別の課題解決として、消費生活相談や、FPによる「親亡き後の資金計画」の策定、ゴミ屋敷や精神疾患への対応など、複雑化した事案に対してあらゆる角度から多様な連携で包括的な介入を行い個別の課題解決にあたっている。

相談状況について、426件の相談のうち、約75%が家族からの相談。家族の不安を和らげ（家族を緩める）、適切な距離感を作ることで、結果的に本人が動き出す事例（75件）が見られた。

今後の課題について、支援員の人材育成と引き継ぎ体制の維持、および「居場所」から「出口（就労や自己実現）」へ繋げるための継続的な伴走支援の充実が欠かせない。

大和市の支援は、どこまでも当事者と家族の困り感に寄り添い、「当事者から一番遠い話（趣味や日常の話題）から始める」という、精神科医・斎藤環氏の知見を活かした極めて人間味のあるアプローチ、こもりびとの理解、家族の不安や罪悪感を緩めるために、講演などによる正しい理解の醸成、家族の集いや当事者の集いによるピアサポートなどの取り組みが特徴であった。